



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	師範学校アーカイブズの構築とその意義(fulltext)
Author(s)	藤井,健志
Citation	東京学芸大学大学史資料室報, 3: 1-7
Issue Date	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/159332
Publisher	東京学芸大学大学史資料室
Rights	

師範学校アーカイブズの構築とその意義

東京学芸大学大学史資料室 藤井健志

はじめに

東京学芸大学大学史資料室では、2015年10月6日に、「国立大学法人における学校教育アーカイブズの課題と展望」と題したシンポジウムを開催した。そこでは今回の室報に原稿をお寄せいただいた小池聖一氏（広島大学）、小川千代子氏（藤女子大学）、倉方慶明氏（東京外国語大学）にご講演いただくとともに、私も「東京学芸大学大学史資料室の課題と展望—大学資料と旧師範学校資料—」という題で、話しをさせていただいた。

今回の室報は、このシンポジウムの報告を中心として構成しているが、本稿ではシンポジウムにおける私の話しの中でも、師範学校資料に関する部分に重点を置いている。その第一の理由は、「東京学芸大学大学史資料室の課題と展望」に関しては、すでにこれまでもこの室報の第一号と第二号において、かなり触れてきたためである¹。そのため本稿において、それらを詳細に振り返る必要はないと考えたからである。

また第二の理由として、今回のシンポジウムが、そもそも東京学芸大学が「平成27年度特別経費（プロジェクト分）—文化的・学術的な資料等の保存等—」に申請して得た経費に基づいたものであることに関わっている。このプロジェクトは「旧師範学校関係資料の保存とアーカイブズシステムの構築」という事業で、師範学校に関するアーカイブズの構築を目指したものである²。そこで本稿においては、私たちの大学史資料室の一般的課題と展望よりも、このプロジェクトに関わるところに重点を置くべきだと考えたのである。そのため以下では師範学校アーカイブズを構築することの意義を考えるとともに、その概要を示したいと考える。

こうした事情のため、本稿は私がシンポジウムで話した内容をそのまま記載したものではないことをおことわりしておきたい。

1. 東京学芸大学と師範学校

最初に東京学芸大学（以下、本学と略記することがある）の前身が東京の師範学校であることを確認しておこう。私たちが大学史資料室を立ち上げ、師範学校アーカイブズの構築に着手したのも、本学の歴史に深く関わるからである³。東京学芸大学は、1949年（昭和24年）、主として東京の青山師範学校、同豊島師範学校、同大泉師範学校、同女子師範学校を統合して設立されたと言ってよい⁴。本学の歴史に師範学校時代の歴史を入れるか、入れないかについては、議論のあるところだが、本学の大学本体および附属小学校に関しては、師範学校時代のいくつかの刻印が残されていることは間違いない。たとえば本学の四つの附属小学校および附属幼稚園は、基本的には戦前の師範学校の系譜をひいている。附属世田谷小学校は東京府の青山師範学校の附属小学校であったし、附属小金井小学校は豊島師範学校、附属大泉小学校は大泉師範学校、附属竹早小学校および附属幼稚園は女子師範学校の附属学校・園であった⁵。現在、本学の附属学校は、主として世田谷地区、小金井地区、大泉地区、竹早地区に分かれて存在しているが⁶、これは前記の4師範学校の歴史を受け継いだからである。ただし本文および脚注で繰り返し触れるように、本学の歴史はかなり複雑であり、それが師範学校アーカイブズの作成を困難にする一つの要因となっている。

周知のように師範学校は、戦前においては中等教育に位置づけられていた。大雑把に言えば、旧制中学校と同じように小学校の卒業生を受け入れ、小学校教員の養成を行っていたのである。そのため教育実習の場として附属小学校や附属幼稚園は持っていたが、附属中学校は持たなかった。現在の本学の附属中学校は、いずれも戦後の1947年が設立年になっているのは、戦後の新しい教育制度に対応するために設置されたからである。また附属高校と附属特別支援学校の設立も戦後である（ともに1954年）。したがって本学の歴史を戦前まで遡って考えようとする場合は、師範学校およびその附属小学校に焦点を当てていく必要がある。

師範学校の歴史は何度かの転変を経ており、概要を捉えるのはそれほど簡単ではないが、本学の前身の中では、東京府小学教則講習所の系譜をひく東京府青山師範学校がもっとも歴史が古い。1873年（明治6年）に当時の麹町区内幸町に小学教則講習所が設立され、1876年には附属小学校も開設された（これが現在の東京学芸大学附属世田谷小学校の「創始」とされている）⁷。

その後この学校は、新校舎の建設、教育制度の変遷に伴う校名の変更を経て、1889年（明治22年）に当時の小石川区竹早町に移転し、さらに1900年（明治33年）に赤坂区青山北町に再移転する。そして元の竹早校舎を利用して、同年、同地に東京府女子師範学校が設立されるのである。なお当初は東京府師範学校という名称だったが、1908年（明治41年）に、女子師範学校を除くと東京府で二番目の師範学校として豊島師範学校が開設されるに及んで、東京府青山師範学校と改称される。同校は、1936年（昭和11年）に、施設の老朽化、狭隘化に伴って世田谷区下馬にもう一度移転し（現在の本学附属高校の地）、附属小学校も同時に移転した（ただし現在の附属世田谷小学校が置かれている場所ではない）。

東京府女子師範学校は、上述のように東京府師範学校のあった竹早町に設立されるが、校地、校舎、附属学校（在籍児童、校舎、校具も含めて）等はそのまま引き継がれた。1903年（明治36年）には附属幼稚園も設置される。一方の豊島師範学校は1908年に当時の北豊島郡池袋に設置された後、1911年に同地に附属小学校を開設する。ちなみに豊島師範学校は1945年の東京空襲で焼失するが、附属小学校は焼け残り、1964年に小金井に移転するまで池袋に存在した。

さらに1938年（昭和13年）、当時の板橋区東大泉（現在の練馬区東大泉）に東京府大泉師範学校が設立され、同年に附属小学校も開設された。前述のように、本来、師範学校は、中等教育に位置づけられており、初等教育修了者を受け入れていたが、1907年（明治40年）の師範学校規程の制定に伴い、初等教育修了者が入学する第一部と、中等教育修了者（旧制中学校・高等女学校卒業者）が入学する第二部とが設置されるようになった。これにより、師範学校の位置は、高等教育に近づいていく。青山師範学校、豊島師範学校、女子師範学校は皆、この二つの部を持っていた。ところが新たに設立された大泉師範学校は、第二部しか設置していなかった。これは師範学校史上初めての試みであるという⁸。

東京府には主として以上の4師範学校が存在していたが、1943年（昭和18年）の師範教育令の改正に伴って、これらは府立から官立（国立）となった。青山師範学校が東京第一師範学校男子部、女子師範学校が東京第一師範学校女子部、豊島師範学校が東京第二師範学校男子部、大泉師範学校が東京第三師範学校とされた。さらに1944年に東京本郷に東京第二師範学校女子部が新たに開設され、翌45年には本郷追分町に附属小学校を開設した（実際には、本郷追分国民学校の児童および校舎を引き継いだ）⁹。

戦後師範学校制度の解体とともに東京学芸大学は東京第一師範学校、同第二師範学校、同第三師範学校および東京青年師範学校¹⁰を統合して設立される（1949年）。当初は世田谷分校、竹早分校、小金井分校、追分分校、大泉分校の5分校と、調布分教場¹¹からなっていた。このうち世田谷分校に大学本部が置かれるが、ここは第一師範学校（旧青山師範学校）の校舎を引き継いだものである¹²。また第二師範学校は前述のように空襲で焼けたため、戦後にいち早く小金井に移転してくる（1946年）¹³。なおこれらの分校は大学の分校であって、附属学校の分校ではないことに注意すべきである。

その後、1953年～55年にかけて次第に分校が整理され、世田谷分校と小金井分校の二つの分校からなる体制がしばらく続いたのち、1964年に最終的に本学は小金井に統合される。なお従来の師範学校の附属小学校は、前述のように本学の附属小学校に移行する。これまで述べてきたような制度の変遷があったため、前に附属世田谷小学校の例で示したように、附属小学校の方が大学本体より古い歴史を誇ることも可能である。

附属中学校の方は、前述のように師範学校時代には存在しておらず、戦後に設立されたものである。世田谷地区、小金井地区、竹早地区、大泉地区、本郷地区¹⁴にいずれも1947年に設置されており、その歴史は附属小学校よりも短い。ただし戦争末期の国民学校高等科を受け継いだり¹⁵、師範学校およびその附属小学校の教員が中学校教員を担当し

たりしており¹⁶、まったく従来の歴史と無関係に設立されているわけではない。

また世田谷区下馬の第一師範学校が大学の世田谷分校とされたため、附属世田谷小学校および新たに設立された附属世田谷中学校は、同区深沢に新しい土地を求めて移転した。なお附属高校は、設立当初（1954年）、深沢および竹早の二か所で授業を行っていたが、1964年に大学の世田谷分校が小金井に移ったために、そのあとの下馬に移転して統合された。

以上が本学および本学の附属学校・園と師範学校との関係の概要であるが、やや錯綜した歴史であることがわかる。1873年からたどれば、確かに歴史は古いのだが、その歴史の中で繰り返し移転をしており、校舎の焼失も経験している¹⁷。現在本学は、本来の師範学校とは全く関係のなかった東京都小金井市に存在している。そこにキャンパスが統合されたということは、他所から移ってきているわけで、ここでも移転がなされているということの意味する。師範学校と同等の歴史を持つ附属小学校も古い資料を持っていたはずだが、やはり師範学校や大学と同じように移転を繰り返している。

本学はこうした複雑な歴史を持っているために、戦前の古い資料を体系的に保持することができていない。本学の前身が東京に置かれた師範学校であり、その歴史は近代日本教育史、特に教員養成史においてきわめて重要なものとなるはずだが、移転を繰り返してきたために、これまで多くの資料が失われてきたと言わなければならない。とは言え、一方でまだ重要な資料も一部が残っているのである。私たちが大学史資料室を立ち上げ、師範学校アーカイブズを構築しようとしたのは、以上のような本学と師範学校の歴史に関わる事情にも基づいていた。

2. 師範学校アーカイブズの意義

最初に述べたように、特別経費による「旧師範学校関係資料の保存とアーカイブズシステムの構築」を考えた際には、上述したような資料の消失や散逸に対する危機感が強くあった。また現在は、戦前の師範学校を卒業した人たちの高齢化が進み、その生存率が低くなってきている時期でもある。一般的に言って、古い資料はそれを保存していた人が亡くなった時に処分される可能性が高い。私たちは師範学校史は日本の近代教育史の中において、重要な位置を占めていると考えているが、それを検証するための資料が失われつつあるのである。

しかも師範学校に関して、全体的にどのような資料が残されているのかについても、あまりわかっていない。個々の師範学校に関する研究は、数はそれほど多くはないが、まったくないわけではない。また全国の大学図書館のOPACで検索すれば、それぞれの大学が持っている師範学校に関する書籍は調べ出すことができる。しかし師範学校に関する残された資料の全体像がわからないのである。

さらに日本の師範学校は戦前には海外の植民地等にも設置されていた。朝鮮半島、台湾、樺太、関東州等である。こうした師範学校において、どのような教員養成がされていたのかも、重要な研究課題である。しかし現在のところ、それらの国々に設置されていた師範学校に関する研究も、あまりされていない。

こうしたことを念頭に置いて、私たちは師範学校関係の資料のデータベースを構築することを考えた。今後の師範学校に関する研究の基盤を整備する必要があると考えたのである。ただしここで、私たちは師範学校について研究することの意味を、あらためて考える必要があるだろう。

山住正己氏は『日本教育小史—近・現代—』において、戦前の師範学校が国家のために教育を行う教員の養成を重視していたと捉えている。そのため寄宿舎生活が重視され、生活や各種訓練には軍隊方式が採り入れられたという¹⁸。こうした指摘は、すでに海後宗臣編『教員養成（戦後日本の教育改革 第八巻）』においてもされており¹⁹、師範学校に対する戦後の批判の一つの類型になっていると思う。こうした観点から捉えると、師範学校の否定的側面が強調される

とともに、師範学校に関する研究基盤を整備する意味も小さくなってしまふ。

しかし私たちが知っておかなければならないことは、師範学校批判がすでに戦前から盛んに行われていたことである。1930年代後半において、たとえば師範学校の卒業生は「明朗快活純真ノ氣象ヲ欠クモノ多キ」として、それが「教育者タラントスルノ抱負モ熱意モナキニ、強制的ニ師道ヲ修セザルベカラザルノ境遇ニ陥レル結果」であるという批判があったという²⁰。もっともこうした批判とそこで出される改革案は、国家のための教員養成という視点ではなくて、師範学校を中等教育に位置づけることの是非および、その専門性に関する議論を中心としている。教育史研究の分野では、こうした議論は教員養成の開放制の問題に関わってくるのだと思うが、本稿で確認しておきたいことは、こうした評価の是非ではなくて、師範学校に対する評価が、すでに戦前から多様であったことである。このような多様性に、私たちはもっと触れるべきだと考える。そこに教育をめぐる様々な視点が見出されるからである。

さらに山住氏も掲書で述べていることだが、師範学校附属小学校においては、一種の自由教育や、教育を教師の側からではなくて子どもの側から捉えなおそうとする試みがされる場合もあった²¹。私は師範学校およびその附属小学校を教育の面から見るだけでなく、そこで行われていた教育実践に関する研究にも注目すべきだと考えている。たとえば本学の前身の一つである青山師範学校附属小学校の理科教育では、次のような研究をしていたという²²。

第一次世界大戦終結の大正8年頃から、児童中心の新教育思潮が澎湃として起こったのである。わが校も、実験観察を中心とした理科教授を主題として研究に着手し、児童実験を主とした理科室を構想した。

師範学校における授業法に関する研究は、現在でもかなり行われているが、私は単に個々の授業方法の問題だけでなく、師範学校およびその附属小学校が様々な研究を行ってきたという側面にも注目するべきだと思う。そこには国家のための教育という観点からは捉えきれない師範学校の多様な側面があったと考えるからである。

もう一つ付け加えるとすると、地方において昭和期に入ると師範学校の統廃合の問題が出てくることである。これは地方の財政問題に関わってくるが、財政の視点から師範学校の統合が図られることがあったのである。兵庫県、広島県、熊本県、鹿児島県においては、住民や同窓会、父兄の反対運動にもかかわらず、一県一師範学校に統廃合されたという²³。こうした問題は、現在の教員養成系大学が直面している問題を髣髴とさせると言えないだろうか。

以上のように、師範学校には様々な側面があり、現在の教育問題と重なる部分も少なくない。師範学校に関する研究は、単に過去のことを明らかにするという意味だけではなく、これからの教育改革についての模索にも役立つという意味があると思う。周知のように、現在、様々な形で教育改革の嵐が起こっているが、中でも本学のような教育養成系大学は、その嵐に直面していると言える。私はこうした嵐を一つのチャンスと考えて、今後の教育改革のあるべき姿を探るべきだと考えるが、その際に過去の師範学校の様々な教育実践やそこにおける研究、さらには師範学校をめぐる諸問題が参考になるのではないかと考えるのである。

藤本清二郎氏は、師範学校アーカイブズについて次のように述べている²⁴。

諸種の性格と形態を持つ師範学校関係アーカイブスを総体として扱い、師範学校自体が（経営資料と教材が合わされて）研究され、日本近現代史の中に位置づけ、同時に今日の教員養成（あるいはその一部としての歴史教育）のありかた、大学全体のあり方を射程に入れるという方向性はあり得ないだろうか。

私たちは藤本氏のこの論文が発表された年（2014年）のほぼ1年前から、特別経費の申請を検討していたが、問題意識はかなり似ていると言うことができる。師範学校アーカイブズの意味をこのように捉えると、それを構築することの意義も明らかになるのではなかろうか。師範学校の研究は、単に過去についての研究ではなくて、現在および未来に関する研究なのでもあり、師範学校アーカイブズの整備はその研究基盤を作るという意味を持つのである。

3. 師範学校資料の現状とデータベースの構築

さて以上のような問題意識に基づいて、現在、私たちはまず各大学の図書館が持っている師範学校関係の資料のデータベースの作成を行っている。これまで教員養成系の単科大学を中心して、十数大学を回って師範学校関係資料を確認してきたのだが²⁵、本学も含めて資料の整理を完全に行っているとは言い難い状況である。資料を収集していても、目録の作成にまで及んでいないケースもかなりあった。また資料の中には、プライベートな情報が含まれていて、公開することが難しいケースも少なからずあった。さらに一旦資料を収集して目録を作成はしたものの、その後の管理がされていないために、その目録に掲載された資料が確実に収蔵されていることを保証できないと言われたこともあった。

これらを踏まえて、私たちはまず各大学の図書館で所蔵されている資料のうち、すでに OPAC で公開されているもののデータベースを作成することにした。すでに公開されている以上、私たちのデータベース上であらためて公開することに問題はないはずと考えたのである。ただし、さしあたって私たちのデータベースと、各図書館の OPAC は連動していないため、その図書館がその資料の公開を取りやめた場合には、問題が起きる。図書資料の公開を取りやめるケースは比較的少ないと考えてはいるのだが、その大学で師範学校の研究をしている特定の教員が、定年等で大学を辞めた場合に、資料の扱いに変動が起り得る。そうした場合は、取り敢えず各図書館と丁寧に連絡を取り合うことで、対応していくことを考えている。

こうした方針を採用した結果として、アーカイブズとは言え、最初の段階では図書資料が中心のデータベースを作らざるを得なくなった。本来のアーカイブズで扱うべき文書の整理が、各大学であまり進んでいなかったからである。また図書資料に限定したとしても、師範学校関係の資料は、膨大な数に上る。大学によっては、図書館の OPAC で「師範学校」または「師範」というキーワードで検索すると、数千の図書がヒットする場合もある。私たちはその中ですべての資料をデータベースに取り込むのか、それとも選別をするのかを考えなければならなかった²⁶。また選別をするのなら、どのような基準に基づくのかという問題もあった。

そこで私たちは第一にそれぞれの師範学校に関する資料を重視することにした。『～師範学校～年史』といった形のものである。そのレベルですら全体像がつかめていないので、そうしたデータベースを作ることに十分意味があると考えたのである。実際には回顧録等も含めると、そうした図書の数は決して少なくない。第二に師範学校が刊行した資料もデータベースに取り込むことにした。前述したように、戦前の師範学校では様々な研究がなされており、その刊行も盛んだった。むしろこうした研究こそ、現代の教育改革に役立つ可能性が高いと考えたのである。

現在は主にこの二つのケースに限定して、データベースを作っているところである。ただしこうした方針を採ると、師範学校の教科書がデータベースからは抜け落ちてしまう。これについてはかなり検討したのだが、現存の教科書類を見ると、明らかに師範学校で使われた教科書とわかるものもあるが、実際にどの程度使われていたのか確認できないものもある。たとえば『師範地理 本科用巻 1』（文部省、1943年）という教科書は確かにあるのだが、これが実際にある師範学校でどのように使われていたのかは、わからない場合も多い。そのためこうした教科書類は、現段階では取り入れないことにした。

また師範学校の図書館の蔵書であったことを確認できる図書資料は少なくない。しかしこれらには当時、一般的に流通していた図書が多く含まれており、師範学校固有のものはそれほど多くないと思われる。私たちのアーカイブズが成熟していけば、各師範学校でどのような蔵書を持っていたかも研究対象に得るし、そこから各師範学校の蔵書の傾向や、それに基づくその師範学校の性格分析も可能になるかもしれない。しかし現段階ではそこまでは難しいので、多くの一般的な書籍を含む師範学校図書館蔵書は、データベースに取り入れていない。

以上のような方針に基づいて、現在私たちは図書資料を中心とした師範学校資料をデータベースに取り入れている。私たちは、データベースを欧米を中心とした各国のアーカイブズ資料のデータベースにおいて互換性を持つ General International Standard Archival Description（国際標準記録史料記述一般原則）、International Standard for Describing Institutions with Archival Holdings（所蔵機関に関する記述標準）、International Standard Archival Authority Record（団

体・個人等に関する記述標準)の基本形式に基づいて作成している²⁷。これから構築するデータベースおよびアーカイブズは、国際的な標準に合わせていくべきだと考えたためである。

以上が、私たちが構築しつつある師範学校資料データベースの概要である。正直なところ、当初私たちが予想していたよりも、困難な状況に直面している。師範学校関係の資料を体系的に集めている大学が少なく、所蔵していた資料の廃棄すら検討している大学があったのである²⁸。そのため予想していたよりも、データベースの構築にははるかに長い時間がかかりそうである。とは言え前述のように、私は師範学校アーカイブズの意義に関しては疑っていない。まずは小規模であれ、データベースを丁寧に作っていくことが重要だと考えている。

むすび

私たちは様々な教育関係の資料を残し、蓄積し、それに基づいてこれからの教育を考えるべきである。現在のように教育改革の必要性が強く叫ばれる時代であるからこそ、過去の蓄積に学ぶ必要が多くなっていると思う。過去の蓄積を踏まえない教育改革は、きわめて危ういものになる可能性が高いし、あまり効率的ではないとも言える。本稿でも少し触れたように、戦前においてすら、師範学校に対する批判が少なからずあり、そこから多様な改革策が検討されていたのである。そうしたものを私たちはもっと学ぶべきである。そうしないと、戦前にすでに問題とされていたことを繰り返しかねない。アーカイブズの意義は、単に過去を学ぶだけではなく、それを踏まえて未来を考えるための基盤を作るという点にある。未来をより丁寧に考えるために、丁寧に過去の資料を残していかなければならないのである。

だからこそ同時に、私たちは現代の資料も未来に向けて残していかなければならない。そこには現在の教育改革にすぐに役立つ資料もあれば、未来の教育改革に対して役立つ資料もあるだろう。過去の様々な営為を現在に活かし、現在の様々な営為を未来に活かすために、アーカイブズは存在するのだと思う。

1 藤井健志「大学における資料保存の意味と意義」『東京学芸大学大学史資料室報』1(2014年)、同「大学資料の電子化をめぐる諸問題」『同』2(2015年)。いずれも東京学芸大学大学史資料室のサイト(<http://www.u-gakugei.ac.jp/shiryoshitsu/>)から閲覧できる。

2 なおすでに平成28年度も同名の事業に関して、共通政策課題(文化的・学術的な資料等の保存等)に対する経費として交付されることが決定している。それにより私たちは今後も、師範学校アーカイブズをより豊かなものにする責任を負ったわけである。

3 本学およびその前身となる師範学校の歴史に関しては、主として東京学芸大学二十年史編集委員会編『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史—』(東京学芸大学創立二十周年記念会、1970年。以下『二十年史』と略記)および陣内靖彦『東京師範学校生活史研究』(東京学芸大学出版会、2005年)に基づいている。ちなみに「創立」は1949年から、「創基」は、本文で述べるように1873年から数える。

4 後述するように、師範学校の名称は何度か変わっており、実際には東京第一師範学校、第二師範学校、第三師範学校それに東京青年師範学校が統合されて、本学は設立された。ただしその歴史的な系譜と現実的な関係を考慮すると、ほぼ本文で述べた4師範学校を母胎としていると言ってよい。

5 ただし師範学校と現在の附属学校との対応関係は、必ずしも単純ではない。たとえば附属小金井小学校は、主として豊島師範学校の系譜をひくが、その一部は東京第二師範学校女子部→東京学芸大学追分分校の系譜をひいている。

6 この他、東久留米地区には附属特別支援学校がある。この学校はもともと竹早地区にあったが(一部は小金井地区)、1966年に現在地に移転した。東久留米地区はもともと豊島師範学校の用地であった。

7 『二十年史』471頁、744頁。

8 陣内前掲書141頁。

- 9 すでに 1941 年（昭和 16 年）より、国民学校令によってそれぞれの附属小学校も附属国民学校と改称されていた。
- 10 本稿では詳しく触れないが、1920 年（大正 9 年）に設立された東京府農業教員養成所を前身とする。
- 11 調布分教場は青年師範学校の教場だが、1951 年に廃止される。
- 12 必ずしも重要なことではないが、1927 年（昭和 2 年）に東横線が東京渋谷と神奈川を結んで運転を開始した時の碑文谷駅は、1936 年に青山師範駅と改称され、1943 年に第一師範駅、さらに 1952 年に学芸大学駅となり、現在に至っている。この駅名の変遷は、本学の歴史を語っているようである。これに関しては、<http://www.takaban.info/index.php?enkaku> を参照した（2016.2.26）。
- 13 小金井には陸軍技術研究所があり、その跡地の一部がキャンパスとして使用されたのである（『二十年史』677～679 頁参照）。土地が広大であったために、後にここに大学が統合される。
- 14 1947 年に文京区東片町に東京第二師範学校女子部附属中学校として設立されるが（51 年に東京学芸大学附属追分中学校に改称）、54 年に附属早中学校と統合されて廃止された。本文で前述したように、第二師範学校女子部の附属学校は、本来公立の小学校を受け継いだものであったため、戦後文京区や地元より校舎の返還要求がなされたためである（『二十年史』872 頁）。ちなみに東京学芸大学附属追分小学校は、1960 年に附属小金井小学校と統合された。
- 15 『二十年史』870 頁参照。
- 16 同書 847 頁参照。
- 17 本稿では触れなかったが、附属小学校や寄宿舎の焼失も起きている。『二十年史』558 頁、602 頁参照。
- 18 山住正己『日本教育小史—近・現代—』（岩波書店、1987 年）49～51 頁、94～95 頁。ただしこの書においては、教員養成の歴史にはあまり触れられていない。
- 19 海後宗臣編『教員養成（戦後日本の教育改革 第八巻）』（東京大学出版会、1971 年）8～9 頁。
- 20 1935 年の全国中学校長協会が出した「師範教育制度改善案」を、海後編前掲書 10 頁より再引用。なお同書 7～21 頁には、戦前における師範学校に対する批判と改革案が示されている。
- 21 山住前掲書 87 頁。
- 22 『二十年史』753 頁。なおここにおける「わが校」は附属小学校のことである。
- 23 小田義隆「師範学校統廃合に関する一考察—熊本県第一・第二師範学校の事例を中心に—」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要（一般教養編）』4-1（2014 年）。
- 24 藤本清二郎「新自由主義時代の博物館と文化財 師範学校関係アーカイブズの保存と歴史研究」『日本史研究』628（2014 年）62 頁。
- 25 このプロジェクトに関連して回ったのは、北海道教育大学、宮城教育大学、上越教育大学、金沢大学、群馬大学、愛知教育大学、大阪教育大学、京都教育大学、奈良教育大学、兵庫教育大学、鳴門教育大学、福岡教育大学である。これらの大学に大学史資料室員が手分けして訪れ、やや詳細に師範学校関係資料について調べさせていただいた。
- 26 もちろん中には、たとえば北京師範大学の刊行書等の、本稿が扱っている日本の師範学校とは関係のないものも含まれている。そうしたものは無条件に削除していった。
- 27 この部分は東京学芸大学大学史資料室の専門研究員である戎子卿氏の教示に基づく。師範学校資料のデータベースのシステムについては、戎氏が中心となって検討しており、私個人も戎氏に教えられることが多かった。
- 28 廃棄は、主として収蔵場所の問題から検討されていた。これについては、私が本室報の第一号および第二号で取り上げた課題と重なり合っている。脚注 1 を参照。